

時代に応じて変化する アナリストの視点

—長期投資の観点からこそ大事になるアナリストの役割—

JPモルガン・アセット・マネジメントRDP運用本部投資調査部

マネジングディレクター 忍 足 大 介



近頃、日本株アナリストという仕事に求められるものが変化しつつある。

ここ数年、アナリスト業務においては、多様なアプローチによる情報収集活動を通じ、世の中よりも早く正確な情報を収集し、情報の内容の成否と実現可能性を的確に把握し分析することにより、情報の非対称性を収益の源泉と捉えて付加価値を生み出すことに力が注がれてきた。しかし、先般より活発化しているコーポレートガバナンスコードやステュワードシップコードの強化の一方で、フェアディスクロージャーの概念拡大と強化により、アナリストの情報収集活動に制限が設けられる傾向が顕在化している。どの程度の範囲まで、どのような水準の制限が設けられるかは未知数である上、具体的な基準が設定されない可能性もある。

この傾向はアナリスト業務にとって、マイナス影響ばかりが懸念され語られることが多いが、果たして実影響はマイナスばかりだろうか。確かに、過度な調査活動の制限は、市場の第一線に携わるアナリストのみならず、多くの投資家や発行体である企業に資本市場と交わる時間軸上の機会損失をまねき、ひいては市場の成長や日本経済の発展にすら歪みやマイナス影響を与える可能性が否めない。

しかし元来、証券取引は非常に厳格なルールの下に行われてきたものであり、いま一度原点に立ち返ることで、アナリストの付加価値創出手